学びを生かしよりよい社会を構築するための実践力の育成

～学校・家庭・地域がつながる人との協働をめざして～

福井県中学校技術・家庭研究会
勝山市立勝山北部中学校　宮本　知枝子

１　はじめに

少子高齢社会に対応して、現行の学習指導要領では、幼児とふれあう活動を一層充実すると共に高齢者など地域の人々と協働することに関する内容を新設している。家庭や地域との連携を図り、人とかかわる活動を充実させることにより、生徒が家庭生活や地域を支える一員であることを自覚できるようにすることを意図したものであると捉えた。

福井県は働く女性の割合や共働き率が高い。また、三世代同居・近居も多く、子供は親や祖父母に見守られながら勉強や運動に打ち込める環境にあると言われ、「全 47 都道府県幸福度ランキング 2022 年版」（一般財団法人日本総合研究所編）において 5 回連続の総合 1 位となった。

一方、地域とのつながりに関しては、小学生の頃は子供会に属するところが多く、自分から働きかけなくても地域とのかかわりをもちやすい。しかし中学生になると自ら意識しないとかかわりをもつことが難しく、生徒も日々の慌ただしさから、地域の一員であることの意識が薄い傾向がある。そこで地域とのかかわり方を主体的に考えられるような学習活動を通して、地域とのつながりを大切にできる生徒の育成を目指し、研究を進めてきた。

２　研究のねらい

(1)　生徒の実態

令和 4 年度に行った坂井･奥越地区中学 1 年生 681 名の生徒の実態調査では、祖父母との同居率は 38.5%であった。令和 2 年厚生労働省「人口動態統計」によれば三世代世帯率は 7.7%であることから、坂井・奥越地区は全国と比較すると三世代世帯率が高いことが分かる。また、近隣に住む祖父母とも交流が多く、「週に 1 回以上会う」と回答した生徒が 38.5%いた。令和 6 年度に行った中学 1 年生 1014 名の生徒の実態調査では、地域の人と挨拶を交わすことは､「いつもしている」59%､「時々している」35.4%であり高い割合だった。地域の人とどれくらいかかわっているかについては、「いつもかかわっている」13.6%、「時々かかわっている」50.5%、「あまりかかわっていない」32.8%､「全くかかわっていない」3.1%だった（図 1）。地域行事などには､「いつも参加している」18.5%、「時々参加している」49.3%と半数以上の生徒は行事に参加していると答えている。祭りや運動会、バーベキューなどのレクリエーション要素の高い行事には積極的に参加している生徒は多いが､その他の行事に参加する割合が低かった（図 2）。

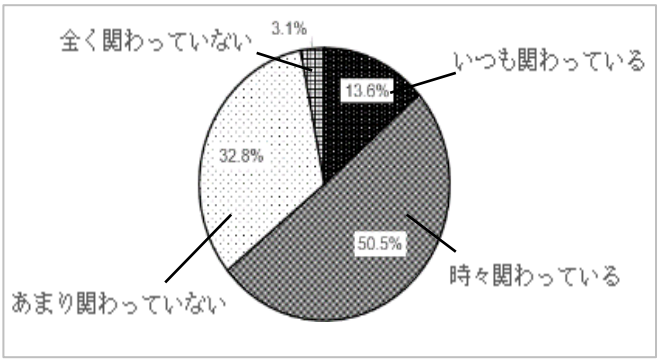


図 1　地域の人とどれくらいかかわっているか

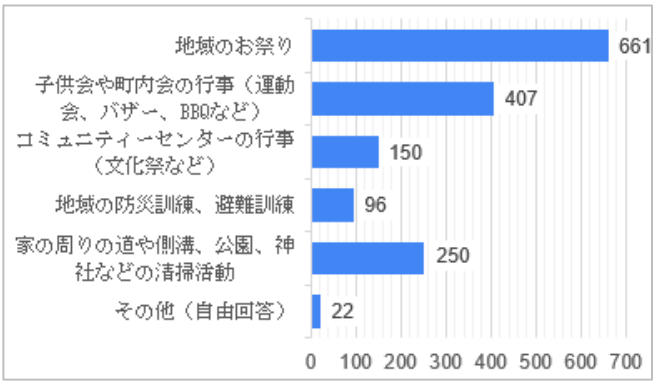


図 2　どのような行事に参加しているか（複数回答可）

地域の行事に参加している生徒は多いが、地域の人とのかかわりは挨拶程度であり、清掃活動や防災訓練などの協働が必要な行事への参加は少ない傾向にある。普段の生活のなかでは、自分の住む地域の良さに気づき、地域の一員として自分ができる活動に取り組むことは難しいようである。

(2)　目指す生徒像

そこで以下のように目指す生徒像を設定した。

・地域の良さを再認識し、地域の一員として、主体的に地域の人々と協働する生徒 ・高齢者や地域の人々を、様々なことを学べる人生の先輩として尊敬の念をもってかかわることができる生徒

(3)　研究の構想

福井県の「学びのプロセス」を踏まえ、次のような視点で研究を行った。

視点 1．地域の行事や活動から学ぶ 視点 2．地域とのかかわり方や協働の仕方 視点 3．主体的・協働的に地域とのかかわりをもつ工夫

3　研究の内容

(1)　実践①

【視点 1】

地域を知るために、三国祭りや金津祭りなど、地域独自の行事や活動を題材に学習した。

行事の開催のために、地域の方が様々な準備をしていることを知った。祭りを開催することは、地域の伝統を守ることにつながることにも気づいた。その後、中学生が運営に参加できる方法を考え、祭りにかかわる方や保存会の方に、アドバイスをもらった。ゴミ箱の設置やポスターの製作などのアイデアを考えたが、ゴミ箱は誰が片付けるか、ポスター製作にかかる費用はどうするかなど、実現の難しさに気づいた。

行事に参加する立場でしかなかった生徒が運営する立場で地域について考える機会になった。

【視点 2】

実際に地域の人とかかわり、協働する方法を検討した。街に掲示するピクトグラムの考案、一人暮らしの高齢者に防災マニュアルカードを作成するなど、地域のためになることを考えた。様々な人の立場に立つことができ、地域の役割やつながりを考えることができた。

また、身近な高齢者の方を授業に招き、インタビューを行ったり、一緒に活動をしたりした。例えば、茶道師範の資格をもつ学校運営支援員とお茶会を行った。お菓子の食べ方、お茶の入れ方を説明してもらい、お茶をたてる体験を行った。楽しいひとときを過ごせただけでなく、お点前などの生徒が知らないことを学ぶことができた。また、社会福祉協議会の方にゲストティーチャーとして授業に入ってもらい、地域の高齢者の困りごとを教わった。自動車運転免許返納後の移動手段、居場所サロン、スマホやSNS の使用についてなど、高齢者の抱える問題を知り、地域の高齢者のために中学生としてできることをグループで考えた。高齢者と直接かかわる専門家に具体的な問題点などを聞くことは、高齢者の困り感をよりイメージしやすかった。また、アイデアをすぐに評価してもらうこともできた。

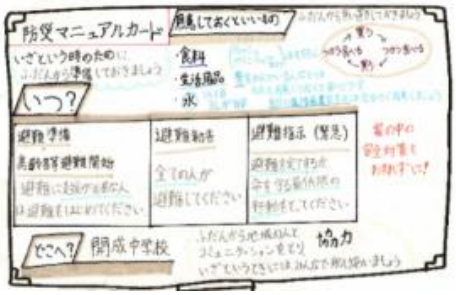


図 3　高齢者のために作成した防災マニュアルカード

【視点 3】

生徒が主体的に実践し、探究する姿勢を育むために各小学校区のコミュニティーセンター（以下コミセン）へ訪問して、センターの代表者やコミセンを活用している高齢者の方に聴き取り調査活動を行った。コミセンの果たす役割や高齢者の抱える問題などを聴き取ることができた。訪問後、聴き取りをした内容をまとめて発表し、共有した。そしてその情報をもとに自分たちが地域の高齢者のためにできる活動、高齢者と共にできる活動について考えた。ジグソー法による発表や考える活動では、一人一人が活動に積極的に参加できた。

図 4　コミセンの様子

これまでの実践では、前述したような成果があった。しかし、地域のためにできることを考えようとすると、地域の人に「してあげる」という内容になってしまいがちである点や労力や時間がかかる点が

課題として浮かんだ。高齢者や地域の人に畏敬の念をもち、生徒が地域のつながりや活動を自分事として受け止め、その学びが授業後も継続していくことを目指したいと考えた。そこで生徒自身が地域のために活動している人を見つけてくることに着目することで、生徒の能動的な学びにつなげたいと考えた。

実践①では、視点の 1～3 のいずれかを意識して、題材を考えてきた。実践②では実践①をもとに、3 つの視点を一つの題材構想に取り入れ、実践を行った。

(2)　実践②

題材の構想（全 6 時間）

＜指導計画＞

時数	学習課題と活動
1	地域を見つめ直し地域とのかかわりを考えよう ・「かがやき宣言」を考える。
2	地域に住む高齢者について知ろう ・高齢者疑似体験、介助体験をし、高齢者とのかかわり方を考える。
3	地域のために活動している人々を知ろう ・「かがやきビト」を紹介し合う。
4	「かがやきビト」の思いを知ろう ・中学生が地域のためにできることを考える。
5	自分の地域を見直そう ・「かがやき宣言」を再検討する。 ・自分だけの「かがやき宣言」を作り実践する。
6	「かがやき宣言」を見直して自己評価をする。 ・「かがやき宣言」を検討、追加をする。

ア　気づき・課題設定（1～3 時）

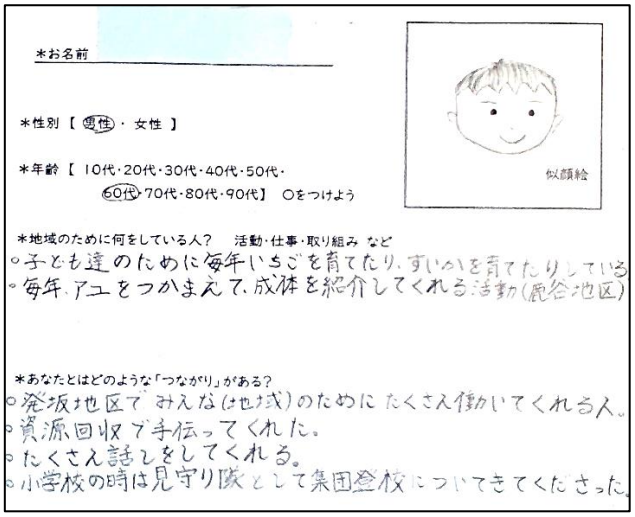
まず、他市町村で実際に提案されている宣言文を参考に、自分たちの地域を振り返り、班ごとに地域をよりよくするために中学生ができることについて案を出し合った。生徒からは「挨拶をするときに一言添える」など様々な案が出された。出された案は「かがやき宣言」としてまとめ、今後の地域とのかかわり方を考える上での指針としていくこととした。

＜かがやき宣言のその他の例＞
・心を込めた挨拶を心がける
・今のきれいな自然を守るため、自然を大切にする
・文句を言わず、積極的に行事に参加する

また、地域の方との協働のためには、様々な人の立場や状況を理解することが大切である。特に高齢者の身体的な状況は中学生には理解しにくい。そこで、高齢者疑似体験、介助体験を行った。生徒の祖父母は若く、元気に活動している人が多いため、高齢になることによる身体能力の低下について知らない生徒が多く、体験は有意義なものとなった。

＜生徒の感想＞
私たちが普通にしている動作も、高齢者には負担であり、難しいことがよく分かった。介助されるとき、身を任せるので、信頼できる人に介助してほしいと思った。普段から、地域の高齢者の方のつながりやかかわりの必要性を感じた。

その後、人生経験の豊富さから得られる知識や技能を持つ高齢者の紹介動画や、地域で活動する人を紹介するテレビ番組の視聴などを通して、地域の人々に関心をもつようになった。そこで、地域のために活動している人「かがやきビト」を家庭学習で見つけ、紹介し、情報を共有し合った。共有し合うことで、地域には様々な活動をしている人がいるとの気づきが得られ、「かがやきビト」に実際に会ってみたい、話をしてみたい、質問したいという思いにつながっていた。


＊お名前

＊性別【 男性・女性 】

＊年齢【 10代・20代・30代・40代・50代・60代・70代・80代・90代】 ○をつけよう

似顔絵

＊地域のために何をしている人？　活動・仕事・取り組み など
○子ども達のために毎年いちごを育てたり、すいかを育てたりしている
○毎年アユをつかまえて、成体を紹介してくれる活動（鹿谷地区）

＊あなたとはどのような「つながり」がある？
○発坂地区でみんな（地域）のためにたくさん働いてくれる人。
○資源回収で手伝ってくれた。
○たくさん話しをしてくれる。
○小学校の時は見守り隊として集団登校についてきてくださった。

図５　「かがやきビト」を紹介するワークシート

イ　構想・計画（4 時）

生徒が探してきた「かがやきビト」に学校に来てもらい①活動内容 ②活動の動機 ③中学生が地域のためにできることは何かという内容で話をしてもらった。実際に「かがやきビト」本人からの話を聞くことで、活動に対する思いがより強く伝わってきた。「かがやきビト」の中には高齢の方もいらした。高齢者の方が、生徒の質問の声が聞き取りにくい時、生徒は即座に状況を理解し、大きな声ではっきりと質問し直すことでき、高齢者理解の深まりを感じた。また、人生の先輩として尊敬できる話を聞き、高齢

者とのかかわりに大きな関心を寄せていた。そして今後中学生がどのように活動していくか考えるうえでの参考になった。

＜生徒の感想＞
　生まれてから勝山に住んでいるけれど、3名の方のお話の内容はどれも聞いたこともなく、知れて良かったと思いました。特にAさんのイベントは聞いたこともないイベントでおもしろいと思いました。やってみたいと思ったことを本当に実現していることがすごいと思いました。

ウ　実践・提案、省察（5～6時）

「かがやきビト」の話を聞いた後、生徒からは、「また紹介したいかがやきビトを見つけたので、ワークシートをください。」「ぼくの見つけたかがやきビトさんにも来てもらいたいのですが、まだこの企画はありますか。」という声が聞かれ、意欲的な態度が見られた。この実践校では、総合的な学習の時間を利用して、この後も何度か「かがやきビト」を招き、話を聞いたり、協働したりする予定である。

　また、別の実践校でも、生徒が見つけてきた「かがやきビト」をゲストティーチャーとして学校に招き、地域での活動の内容や中学生への思いを聞く場を設定した。地域のなかで中学生がどのような存在なのか、客観的に知ることができる機会になった。「夏休みのラジオ体操に来てくれているが、朝早いので元気がなく寂しい」など、少し厳しい評価もあったが、温かい言葉もいただけたことが成果だった。その後、以前の授業で考えた「かがやき宣言」を見直した。ゲストティーチャーとやりとりをしながら、できることを真剣に検討し、より具体的なものにすることができた。また、授業後、ゲストティーチャーにもこのように中学生とかかわる機会をもてたことを喜んでもらうことができた。

＜生徒の感想＞
・地域のためにボランティアをしていると聞き、かげで私達を支えてくれていることを知り、感謝したいと思った。「あいさつは人生の最大の宝」という言葉を聞き、しっかり言える人になりたいと思った。
・地域のために様々なことで貢献していて尊敬した。これから地域で何か起こったとき、ボランティアが必要な時は自分で進んで、地域の役に立てるように暮らしていきたい。

　授業の終末には「かがやき宣言」をもとに、これから個人で実践を行うように促した。年度末には、「かがやき宣言」をどの程度実践できたか、振り返ると共に、再度内容の検討をしていく。

４　研究のまとめ

(1)　成果

　「地域とのかかわり方を考える」という本題材は活動に時間がかかることや、人材探し・交渉等で労力がかかる傾向がある。令和２年度に行った福井県下の家庭科教員に対するアンケートでは「大切なことは分かるが、時間がとれず、実践しにくい。」という声が多かった。そこで、実践校では、総合的な学習の時間と関連付けて行うこととし、担当学年の教員と共に準備を行った。そして「かがやきビト」から話を聞いたり、協働したりする時間を総合的な学習の時間に行うことで時間の確保が可能となった。また、生徒が探し出した「かがやきビト」を冊子として保存し、「かがやきビト」の話を動画として残し、地域の学校間で共通に使える教材とした。

　実践を通して、地域の人々の思いを知ることで「自分たちにできることを考えて終わるのではなく、それを実行できるようにしたい。」という感想から分かるように、生徒の実践意欲につなげることができた。また、地域の人々が、様々な取り組みをしていることを知ることで、地域の良さを再認識すると共に、高齢者や地域の人々への尊敬、感謝の気持ちをもつことができた。そして「自分たち中学生も、地域のために役立つことができる。」と、地域の一員としての意識をもつと共に「将来、住みたくなるような地域づくりをしていきたい。」という将来を見据えた課題も見つけることができていた。

(2)　今後の課題

　生徒が地域の一員として、この学習で学んだことを地域のなかで継続して実践してほしいと考える。そこで、定期的な振り返りが必要である。そして、中学生としての３年間での変容をどのように評価していくかが今後の課題である。

　また、家族・家庭生活の分野では、今回の「地域とのかかわり」だけでなく、「幼児とのかかわり」の学習内容もある。「家族・家庭生活」の全題材の指導計画を見直し、他教科との関連を図りながらの内容の検討が必要であると考える。